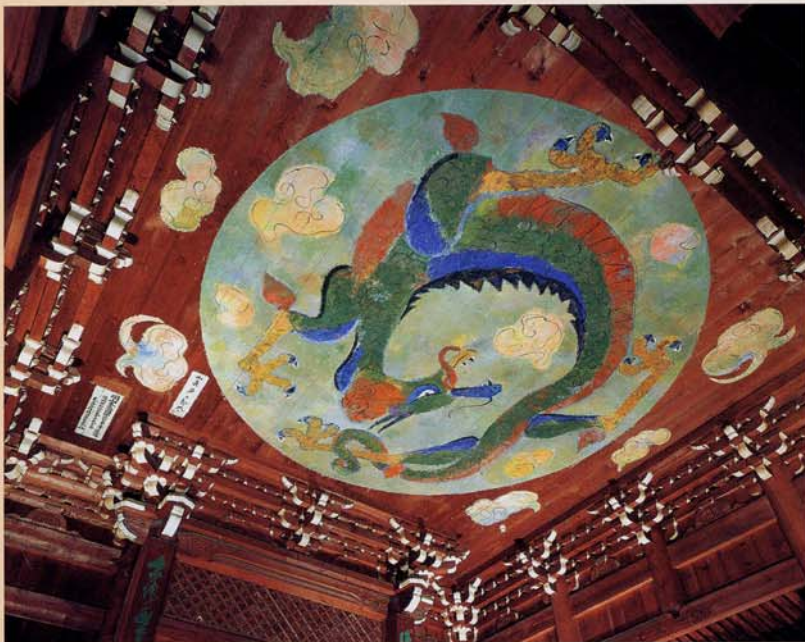


市宮一
館物博
りよだ

No.35 2004.10



妙興寺仏殿天井画《蟠龍図》
山喜多二郎次・作 1956年

山喜多 二郎太

— 禅寺の天井に油彩で竜を描いた画家 —

十月九日(土)～十一月十四日(日)

今から約五十年前の一九五六年(昭和三十一年)、臨済宗の古刹妙興寺(一宮市)の仏殿天井に巨大な《蟠龍図(ばんりゅうず)》が描かれました。作者は、当時日展・光風会展の重鎮として活躍していた洋画家山喜多二郎太(やまきた・じろうた 一八九七一―一九六五)です。この蟠龍図は、妙興寺の勸請開山円通大応国師六百五十年遠忌を記念して制作されたものですが、寺院の天井に竜が描かれた例では、妙興寺の本山・妙心寺の法堂に描かれた狩野探幽の作が著名で、近代以降では、南禅寺の

今尾景年、東福寺の堂本印象、天龍寺の加山又造、鎌倉建長寺の小泉淳作の作品が知られています。しかし、いずれも日本画家の手になるものであり、油彩で描かれた例は他に聞かれません。仏殿は、一宮市ゆかりの画家佐分眞(二八九八―一九三〇)の母田中たまの寄進により一九二五年(大正十四)に再建されたものですが、佐分とは東京美術学校(現・東京藝術大学)の一年先輩で生涯親交を結んだ由縁もあり、彼の遺志に従って制作を手掛けたのです。制作当時、この天井画は伝統と非伝統との調和と称され、大いに注目を浴びたものでした。



真下から見上げた《蟠龍図》1956年

絵の制作は、天井を縦にした状態で行われましたが、分厚い天井板なので、おそらく一枚ずつ降ろして組み合わせ、完成後はまた天井で絵を合わせながら丹念に組み合わせさせていったものと思われます。円の直径が七呎ほどという広い面積のため、絵の具代だけで七十万円を要したそうです。

※蟠竜は、通常は「ばんりゅう」と発音し、とぐろを巻いているが、天に昇らない竜のことをいうが、仏教においては「ばんりゅう」と発音している。

山喜多二郎太は福岡県の出身で、主に帝展・日展・光風会展で活動するとともに、福岡県の美術会に尽力しました。彼はまた、洋画とともに日本画も学び、一九二六年(天正十五)、画壇の仲間が皆パリへ遊学する中を独り中国へ渡ったという異色の画家ですが、そのことが南画スタイルの洋画と称される独自の画風や、晩年多く描いた水墨画に影響を与えたものといえます。大正から昭和の時代、絵を志す者たちの多くはそれまでの日本の伝統という枠にとらわれない、自由な自己表現というものをめざしていました。二郎太もそのうねりの中で育った画家のひとりですが、彼は伝統と非伝統そのどちらからも目を背けず、そのどちらにも自由になれる、



画竜点晴 1956年12月16日

そんな表現方法を求めていたのではないかと思います。仏殿天井画《蟠龍図》は、そのことが最もよく示された作品といえます。自在な心境から生まれたものなのか、軽妙で淡雅、温和な画質が彼の絵に一貫して流れている基調です。仏殿という荘厳な建物の扉を開けてこの天井画を見上げた時、おそらく誰もが最初は意外な感じを受けるものの、しばらくするとどこか懐かしい雰囲気を感じられるのではないのでしょうか。

Information

会期 平成十六年10月9日(土)～11月14日(日)
 休館日 毎週月曜日(ただし10月11日は開館)および10月12日(火)・11月4日(木)
 観覧料 (常設観覧料を含む) 一般500円(400円)、高・大学生300円(240円)、小・中学生150円(120円)
 ()内は前売りおよび20名以上の団体料金
 ※学校休業日の土曜日は小・中学生無料。一宮市発行の「シルバー優待証明書」ご持参の方は無料。
 愛・地球博前売り券(引換券)ご持参の方は団体料金適用。
 観覧券の前売所 / チケットぴあ、びあスポット、ファミリーマート、サンクス、セブンイレブン、一宮市生涯学習課、一宮市博物館
 主催 / 一宮市博物館・中日新聞社
 協力 / 妙興寺
 後援 / 愛知県教育委員会
 記念行事 / ①記念講演会:10月24日(日)13時30分～ 妙興寺仏殿にて(聴講無料)
 「妙興寺天井画と山喜多二郎太の画業―油墨一如への道」 講師:山喜多時志氏
 ②展示説明会:10月16日(土)・30日(土)13時30分～ 展示室にて 解説:当館学芸員
 ③仏殿開扉:会期中の毎土・日曜日および10月11日(月)・21日(木)・22日(金)の午前10時～午後4時まで天井画をご覧いただけます。(一宮市博物館の観覧券をご提示ください。)
 ◎会期中、10月25日に作品26点を陳列替えします。
 前期:10月9日から10月24日まで、後期:10月26日から11月14日まで



当館では、これまでご遺族から多数の作品をご寄贈いただきましたが、この展覧会はそのお披露目も兼ね、帝展・日展などへの出品作を中心とした油彩画二十五点と心温まる墨彩画六十四点、そして妙興寺天井画の下絵や関連資料も紹介します。また、会期中の土・日曜日と十月十一日(月)・二十一日(木)・二十二日(金)には仏殿の天井画を公開します。油彩と墨彩、西洋と東洋が交叉するその独自の絵画世界を是非とも鑑賞ください。

さて、ここでひとつエピソードをご紹介します。この展覧会を開催するにあたり、印刷物用の写真撮影のため天井に向けて照明を当てた時、たいへんな問題を発見しました。普段は、床から七・八畳という高い天井であることと、薄暗い中を見上げるため細部にまで目が届くことがなかったのですが、明るく照らされた竜



図の、その彩色の美しさにみとれていると目を疑うような光景がそこに拡がっていました。竜の身体に白いものがいくつかに入ったのでよく見ると、そこは絵の具層がめくれあがり、下地のホワイトが見えていたのです。肉眼でも大きな絵の具の剥離が二、三カ所は見え、大きなものは今にも落ちてきそうでした。そこで急遽、アート・コーディネーターの方に相談し調査を依頼しましたところ、経年変化により油成分が抜けて絵の具の亀裂が広がっており、下地から剥離しているところも無数にあるということです。本格的に修復するには天井を降ろし画面を水平にする必要があるが、天井降ろし工事となると相当な費用もかかるであろうし簡単にはいかない。しかしこのままでは数年のうちに剥離してしまうであろうというので、早速事の顛末を妙興寺ご



住職に報告しましたところ、この天井画は河野宗寛老師以来半世紀の間寺宝として護り伝えてきたものであるからこのまま放置するわけにもいかないでしょう、と英断を下されました。そして、応急的ではあります直ちに処置を施してもらうことになった次第です。しかし問題となったのは、天井を見上げながらでしか作業が出来ないため、その足場の確保ですが、これは、昨年以来南側の建物・三門の修復工事が行われていて、この頃丁度その完了を迎えていた時にあたり、請け負っていた竹中工務店のご厚意により仏殿の中に足場を組んでもらうことが出来ました。そしていよいよ七月八日に修復作業が始まりましたが、折から季節はずれの猛暑が到来した時に重なり、天井近くは風の流れが悪くたいへんな暑さのため、大型扇風機で天井に風を送りなが

らの難事業となりました。修復作業は六日間で一応の成果を収め、見事に《蟠龍図》が蘇りました。この天井画は、今度の特別展では一番の話題作であり、是非とも多くの皆さんにご覧いただきたいと願っていましたので、急な要請にもかかわらず仕事の予定を切り替えて修復に携わっていただいた吉村美術研究所の皆さん、そして多くの制約の中を的確にコーディネートしていただいたエーシーエスの皆さんをはじめ、ご協力いただいた皆さんに感謝申し上げます。ただし今回の修復はあくまでも応急処置であり、何年か後にはまた新たな問題が発生することが考えられます。本格的な修復をいつかは行わなければなりません。診断に見合った処置を施すためにはより多くの方々のご援助・ご協力が必要となつてきます。ミケランジェロの壁画《最後の晩餐》の修復過程を例にしますと、先人の残した文化遺産を修復保存することも人類の一つの文化事業なのだと思えさせられます。仏殿天井画《蟠龍図》が、誕生して間もなく半世紀を迎えようとしています。が、こうした先人の残した仕事、今後何百年の後も多くの人に感動を与えてくれることを願ってやみません。(毛受英彦)



《農村風景》油彩・画布 1947年

企画展 くらしの道具 ～今と昔～

2005.1.8(土)～2.20(日)

展示手法の展開

「くらしの道具～今と昔～」展は、平成三年度から十四年の長い期間にわたって毎年継続開催をしてきた、小学校四年生のための展覧会です。平成十三年度までは小学校三年生のカリキュラムに合わせた展覧会でしたが、平成十五年度からはカリキュラムの変更により、小学校四年生がその主な対象となることになりました。そこで、これまでの今と昔という時間軸の比較に、自然環境による生活のちがいでという空間軸の比較を交錯させる展示へと手法を発展させました。

ここでは、「平野の暮らし」という基軸に「海の暮らし」「山の暮らし」が加わります(図1)。根底に流れているのは、木曾川。一宮市は、木曾川左岸に位置し、その地盤は扇状地と沖積平野になります。これがキーワードなのです。

1 まず、地図で私たちのくらししている場所をさがそう！一宮市のほとんどの地面は、木曾川が流した砂がもたせてできました。砂をほりすすんで、地下20メートル下でやっと石が見つかる場所もあります。

2 一宮市の北側を流れる木曾川をさかのぼろう！源流はどこかな？今回展示している山の道具は、木曾郡開田村・木曾福島町・木祖村で使われていた生活道具です。どこにあるかな？どんなところかな？

3 木曾川をくだってみよう！どこに出るかな？今回展示している海の道具は、知多郡南知多町・渚美郡渚美町で使われていた生活道具です。どこにあるかな？どんなところかな？

てんじ みかた
展示の見方

さあ、石向け～石！
まずは、一宮で使われていた平野の生活道具。
今のくらしの道具とくらべてみよう。
材料、大きさ、形、変わっていないもの、今はもうないもの…
そして、特別展示室に入ってみよう！
山と平野と海、生活道具の材料、大きさ、形を観察してみよう。
くらし場所によって、どこがちがうかな？どこがいっしょかな？

図1 展示の考え方



単純な比較と複雑な比較

物資の流通は、古代よりこの川を中心とした流路に頼ることが多かったと考えられます。そして、流通の発達には物資の流入を招き、自作民具の減少を促します。たとえば、常滑から運ばれた大きなハンドガメや、瀬戸から運ばれた陶器のコネバチ。三重県の宇治山田から運ばれた伊勢春慶のハコゼン。当たり前だと思える素材や道具が、木曾川を遡った地域では異なったものになってしまふ。流通も含めて、自然環境に影響された生活や道具の発達がそれぞれの場所にあることを、地域色が消えつつある今だからこそ、子どもたちに伝えなければならぬのではないかと思います。

しかし、「陶器のコネバチを使用する尾張と、トチノキを削り貫いた木のコネバチを使用する木曾川上流部」といったような単純な道具比較ができるものは多くありません。竹タガの桶と檜板のタガが嵌まった桶。子どもたちに、自然環境だけではなく、社会的・歴史的要因を含めてその道具の背景を説明することは、非常に難しいことです。そこで、その単純化が今年度の目標と言えます。



写真1
大志小学校の日置梨恵さんの新聞から
展示見学の後に子どもが作成した新聞を見ると、展示意図が伝わっていることもよくわかり、先生方との意志疎通が生む効果を再認識することができる。

一人ひとりと話す

本展覧会は、タイトルこそ十四年間変わらなかつたものの、展示手法および子ども向け解説書は、同じものは絶対に作らないことを目標にしてきました。各教室で予習・復習をして下さる先生方にとっては、毎年変わるこれらの方向性は、資料を作り直すという苦痛を与えてしまうものに相違なかつたと言えます。しかし、だからこそ生まれる期待感や緊張感はこの展示を発展させ、強制的ではなく自然に博学連携を育てた要因であつたと考えます。そしてこれからは、子どもたちと語り合う場を生み出す展示を目指していきたいと考えています。

(久保禎子)



写真2
これまでの解説書
注) デザインはすべて柳田智子による。



博物館講座

子どものための尾張歴史講座

〜見る・聞く・さわる考古学〜

8月中の毎週日曜日

博物館では、学校では得られない歴史体験を通じて、地域文化に対する子どもたちの関心や興味を引き出し、画一しつつある社会の中で、ふるさとを愛し地域性の比較ができる思考力を持った子どもたちを育てる支援ができるのではないかと考えてきました。さらに今年度は、「博物館歴史授業」事業を開始することになったため、夏季企画展共催機関の愛知県埋蔵文化財センターや多くの講師のみなさんご協力を得て、子どものための尾張歴史講座をさらにバージョンアップすることができました。

講座は全五回。土器作りや石器作りなど、単純に一つのを製作する講座ではなく、「石器を作った後に骨角器を作る」といった、素材や時代によって道具がどのように変化するかなど、「考えてみる」ことをテーマとした講座でした。

8/1(日)

石器を作る・石器を使う(骨角器を作る)・石器を観察する



(久保禎子)

8/29(日)

金属器...耳飾りを作る



8/22(日)

8/8に作った土器を、愛知県陶磁資料館の講座で野焼きしました!



写真提供:愛知県陶磁資料館

8/22(日)

古代人から学ぶ木の性質と木の道具



8/15(日)

縄文時代の布を編む・弥生時代の布を織る



8/8(日)

土器を作る・土器を使う・土器を観察する



小学校6年生のための
博物館学芸員による
歴史の授業

博物館では平成十六年度より、小学校6年生を対象とした学校での授業を始めました。その発端は、子どもたちに博物館を紹介するとともに、歴史を教科書とは異なる側面から考える機会を提供したいと考えたことにあります。また、博物館に収蔵されている数多くの貴重な歴史資料(実物資料・復元資料)を活用することにより、子どもたちの歴史学習に対する関心・意欲を高めることができるのではないかと考えました。

テーマは「つが」が「やきものから見た歴史」、もう一つが「人々の暮らしから見た歴史」です。縄文時代から焼き始められ約二万二千年の歴史を持つ土器、古墳時代に朝鮮半島からその技術がもたらされた須恵器以降約千五百年の歴史を持つ陶器、そして日本では江戸時代に生産が開始された磁器。前者は、これらの焼き物の変遷をたどりながら、歴史の流れを概観するものでした。土器、陶器、磁器などの実物資料を観察しながら、それらの特徴、使い方を考えてみました。



神山小学校での授業風景

子どもたちにとって、今さわっている土器が本物かどうかがとても重要だったようです。複製品ではなにも感じない「本物」をどうやって感じようか。



浅井南小学校での授業風景

シカの角や石器、織物の材料であるカラムシの繊維や絹など、子どもたちは日頃あまり手にすることのない道具や素材に目が輝いていました。「次の授業に遅れるよ!」という言葉が、日常の癖になってしまいました。写真提供:浅井南小学校



もう一つのテーマは「人々の暮らしから見た歴史」。小学校四年生の授業で「くらしの道具」今と昔」展に来館した子どもたちはその際に、七十〜百年前の「むかし」について学びました。ここでは、人物を中心に歴史を学習する教科書からはわかりにくい庶民の暮らしの様子を、まずは近代の衣・食・住を中心に考えることができました。そこで、この授業では、時代をさらにさかのぼり、縄文時代から現代への人々の生活の変化について概観するのを目標としました。特に、「宮の基幹産業であった織物の道具の歴史、あるいは衣類の歴史については、復元資料や材料を実際にさわりながら考えました。食についても、ドングリやトチの実などを主食としていた縄文時代から稲作の始まる弥生時代への変化、そして近代にも残っていたドングリやトチの実などを食べる習慣などにも触れるました。

今回、子どもたちの心の中で、古代と現代を、そして未来をつなぐ架け橋とすることができたかどうか、長い時間をかけて、子どもたちとともに考えていきたいと思います。

(土本典生・久保禎子)

平成16年
4月24日
～
5月23日

春季企画展

「文化財フォーエバー」
「文化財の修理」

昨年度、市指定文化財「紙本著色兼松正吉画像」が保存修理されたことを機に、絵画を中心とした文化財の修理技術を紹介する企画展を開催しました。「兼松正吉画像」は「宮市島村出身の戦国武将の肖像画で、彼の死後追慕のために描かれたものです。桐箱に納められた昭和十一年の添書により、本作品は「時期行方不明になっていましたが、昭和十年に正吉のご子孫にあたる方が古物商より購入し表装を行った」とあります。その後は兼松ゆかりの若栗神社八幡宮に奉納され、平成二年より博物館が同社からお預かりをしています。しかし近年、横折れなどの損傷が目立ちはじめたため、約七十年ぶりの修理をお願いすることとなりました。展覧会では、



▲絵画の修理と装演の世界



▲展示説明会



▲絵画修理に使用する刷毛・筆

修理を行った工房より実際に使用した道具や材料など約八十点をお借りし、また修理の工程を約六十点の写真パネルで詳細に解説しました。

会場ではこのほか、仏像や漆工品、建造物の修理、また文化財の生物被害防止に有効な「燻蒸」について紹介しました。さらに「史料から見る文化財保護と人々の想い」と題し、文化財保護制度が誕生した明治時代から戦前までの調査や補助、修理等の諸記録を展示しました。(岩井章真)



▲昭和初期の彫刻修理(妙興寺蔵)

平成十六年度の文化財保護事業

○妙興寺三門保存修理(補助事業)
市指定・建造物、妙興寺



▲伊勢湾台風による被害

妙興寺境内を南参道より訪れると堂々とした三間三戸の二重門・三門が姿を現します。三門は禅宗寺院の主要な建物の一つで寺が開かれた二四世紀より建てられていたものと考えられます。

江戸末期の弘化四年(一八四七)に大風で倒壊しますが、同年中に官許を得て再建を開始し、安政四年(一八五七)迄には下層が完成しました。しかしその後工事は一時中断し、上層が出来上がって再建が成ったのは明治十二年(一八七八)のことでした。上層部分建設時の収支決算帳が寺に残っていましたが、それによると費用のほとんどは妙興寺村を中心とした周辺地域からの寄付で賄われていたことが分かりました。



▲修理中

その後明治二十四年の濃尾大震災、昭和三十四年の伊勢湾台風と度々自然災害による被害を受けましたが、その都度修理されています。

そして今般、平成十五年十月一日から平成十六年七月三十一日にかけて大規模な修理工事が行われました。これは経年により発生した屋根を中心とした損傷をきちんと直し、更なる被害を予防する為に実施したものです。既存の葺材を除去し、小屋組等を修補の上、屋根を葺き直しました。(岩井章真)



▲竣工

写真提供:(株)竹中工務店



愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター・一宮市博物館の共催で、平成一六年七月十七日(土)から八月二十九日(日)まで開催しました。

企画展「弥生水都二千年」では、葉栗郡出身と考えられ、葉栗の尼寺を建立したと言われる葉栗臣人麿が、むかし話を語るといふ展示構成のもと、弥生時代の始まりから、古墳時代までの歴史の流れを概観するとともに、大和町荻安賀の八王子遺跡で検出された井泉祭祀の場を復原して展示しました。弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのこの地域の先進性を垣間見ることができたかと思えます。

平成16年
7月17日
8月29日

企画展

「弥生水都二千年」
葉栗臣人麿が語る
「考古学むかし話」

また、元屋敷遺跡出土線刻土器に描かれた動物と船の絵から、子どもたちに「カゲロウムラ物語」というむかし話を創作してもらいました。お話あり、イラストありでかなり楽しいものとなりました。その中で、Aさんの作品を紹介しますが、なかなかよくできていると思いませんか。

(土本典生)



▲ギャラリートーク



ある日、カゲロウムラに1頭のシカが迷いこんできました。カゲロウムラの人たちはそのシカをしとめようとしてきました。そこへ川におふねがやってきました。おふねからカゲロウムラの村長さん、村長さんの娘がでてきました。その娘はとてよやさしい子だったので、「お願い、そのシカを殺さないで」といいました。でも村の人たちや村長さんは「ダメだダメだ!! 昨日、向こうの方で大きな泉がはっけんされただろう。だから今日のお祭りで、シカをおまつりのおそなえものにするんだ!」娘は悲しくてたまりませんでした。なんとかして今日のお祭りまでに、シカを逃がしてやろうと考えました。

そしてその夜…。娘はシカがつながれている小屋へかけ込みました。「さあ、はやく逃げなさい。」シカは「ありがとう」という目で娘を見ました。そして山の奥へと走っていったのです。しかし村の人に見つかってしまったのです。シカは石を投げられています。そこへ娘がシカをかばい、「やめて! このシカは何もしていないわ、離してやって!」というのです。村人たちはしかたなく逃がしてやりました。次の日、シカが走り去った後の足跡を見てみると…水が湧きだしてきたのです。その次の日はもっと大きな泉ができていました。娘は「あのシカが泉を湧かせてくれたんだ!! ありがとう」と心の中で思いました。そしてカゲロウムラの人たちは、シカに感謝しました。そして、それからというもの、たくさんの泉ができ、動物たちもたくさんあらわれるという。

(原文のまま)

「元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅳ」 発行

平成八年と九年に実施した丹陽町伝法寺地内の遺跡発掘調査のうち、元屋敷遺跡の古墳時代の報告書を刊行しました。A四判、一二二ページの冊子で、あわせて平成元年に実施した範囲確認調査で出土した遺物も掲載しています。

一部九〇〇円で頒布しますので、ご希望の方は博物館受付でお買い求めください。



平成16年
8月20日
8月29日

企画展

「一宮市学童写生大会 作品展」

市内の幼稚園児・小学生・中学生参加の学童写生大会上位入賞の作品など三五九点を展示しました。多くの子供達が熱心に絵を見入っていました。



平成16年
6月16日
6月30日

企画展

「二〇〇四一宮美術作家新展」

一宮美術作家協会四十七人による、最新の発想でイメージの試作を展開した力作を展示しました。出品作品は日本画・洋画・彫塑・デザイン・工芸に及びました。



平成16年
6月4日
6月13日

企画展

「一宮写真協会一〇人展」

一宮写真協会会員による、感性に裏打ちされた表現力で熱い思いを込めた作品四十八点を展示しました。モノクロ、カラーともに印象深く、力作ぞろいでした。

平成16年度下半期催し物のご案内

10月9日(土)～11月14日(日)

秋季特別展 山喜多二郎太一 禅寺の天井に油彩で竜を描いた画家 —
於:特別展示室、ラウンジ、展示室4、講座室、ギャラリー

11月2日(火)

市民文化財めぐり 於:真清田神社宝物館、金刀比羅宮、浄蓮寺、禅林寺 他

12月4日(土)～12月19日(日)

企画展 2004 一宮市現代作家美術秀選展
於:特別展示室、ラウンジ、展示室4、講座室、ギャラリー

1月8日(土)～2月20日(日)

企画展 暮らしの道具 ～今と昔～ 於:特別展示室、ラウンジ

3月6日(日)～3月20日(日)

作品展 手つむぎ・染め・織り展 於:特別展示室、ラウンジ

3月5日(土)、3月6日(日)、3月20日(日)

博物館講座 はにわをつくろう 於:講座室、妙興寺境内

3月27日(日)

民俗芸能公演 島文楽・宮後住吉踊 於:講座室、妙興寺公民館

頒布図書のご案内

【文化財報告書】

一宮の文化財めぐり(H11刊・800円) 一宮の民俗(S56刊・1,000円) 丹陽町池之上遺跡発掘調査報告(S54刊・300円) 一宮の民家(S54刊・1,000円)
榎の木文化資料(S55刊・400円) 一宮の民具(S55刊・800円) 一宮の石造遺物(S60刊・1,000円) 市内遺跡発掘調査概要報告書(H4刊・900円)
法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書(H7刊・800円) 元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅲ(H12刊・700円) 西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査
報告書(H14刊・500円) 元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ(H16刊・900円)

【市史】

本文編 上下組(S52刊・8,000円) 市域小字図 2枚1組(S52刊・700円) 年表(S63刊・1,500円) 他

【図録】

一宮の名宝(Ⅱ)(S63刊・400円) 一宮の名宝(Ⅲ)(H1刊・600円) 美人画にみる織維の手仕事 一蚕織錦絵-(S63刊・500円) 地機で織る[越後縮]
(H2刊・620円) 豊蔵の至芸(H2刊・800円) 結城紬 一地機で織る(Ⅱ)-(H5刊・800円) 一宮の名宝(Ⅳ)(H6刊・600円) 賢治・志功・一英 一児童
文学を巡る人々-(H8刊・1,000円) 妙興寺雲宝展(H9刊・1,500円) 画家佐分真の軌跡(H9刊・1,300円) 人間国宝 加藤卓男展(H11刊・1,500円)
河井寛次郎と棟方志功(H11刊・1,500円) 寛 忠治(H12刊・1,500円) 銅鐸から描く弥生社会 ～埋められた銅鐸の謎～(H13刊・700円) 川から海
へ1～人が動く・モノが運ばれる～(H14刊・800円) 銅鐸から描く弥生時代[シンポジウム開催記録](H14刊・1,700円) MOA美術館名品展 一黄金の
茶室とわび茶の世界-(H15刊・1,500円)

一宮市
博物館
だより

第35号

発行日 平成16年10月15日
編集・発行 一宮市博物館
制作 サンメッセ株式会社

利用案内

名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車徒歩7分
〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL 0586-46-3215 FAX 0586-46-3216

【観覧料】(常設展・聴講料含む・特別展の場合は別途定める。)
一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)
小中生=50円(40円) * () は20人以上の団体料金

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始(12月28日～1月4日)

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※一宮市内の小・中学生は無料。(特別展期間中はのぞく。)

※土曜日は小・中学生無料。(長期学校休業日および休日はのぞく。)

※一宮市発行の「シルバー優待証明書」持参の方は無料。

【HP】<http://www.city.ichinomiya.aichi.jp/division/museum/index.html>

